

尖閣諸島で花火

川瀬 進一

二メートルを優に超える白い石塀に囲まれた時代掛かった日本家屋。どれくらい敷地なのかは庶民には計り知ることできない。塀の上には外からの侵入を防ぐための有刺鉄線の柵が設けられ、内側には大人がやつと抱えきれるかといった幹の太いクヌギや楠、けやきがぐるりと覆い繁り、何人たれとも入れてなるものかと宣言をしているかのようだ。さらに、何台もの防犯カメラが赤く小さな灯りを一日中放っている。

「ご依頼を受けました修理屋でございます」

時代劇を彷彿させるかのような檜作りの太い門柱に川内と書かれた大きな表札が掛かっている。三世代にわたって引き継がれた代議士、川内誠太郎の本宅の呼び鈴を萱津利晃が押した。

「どうぞ。お待ちしておりました」

女の声がインターホンから流れるのと同時に、右側に設けられた脇戸ではなく大きな板張りの門が静かに開いた。

母屋の玄関先まで石畳みが引き詰められ、足下に埋め込まれた灯りが薄暗い庭園に足を踏み入れる利晃に安心感をもたらしてくれる。

「どうぞ。川内大臣がお待ちです」

防衛大臣付のSPと思われる屈強な男は利晃に身分証明の提示を求め、免許証を確認するとガラスの入った大きな格子戸を開けて利晃を招き入れた。

「申し訳有りません。規則ですので念のため」

靴を脱いで、上がり框に足を掛けると同時に女性のSPが利晃が下げている二つの道具箱の中を開けるように促した。女のSPは何処までも笑顔を崩すことはないものの方が一にも備え、いつでも反撃できるとばかりに隙も見せてはいないように利晃には思えた。

「秋山さん、その必要はないから……。修理屋さん待ってました。どうぞこちらへ」

次の次には総理大臣の椅子がと目された若き大物政治家、川内誠太郎の貫禄がSP秋山裕美巡査長の手を制した。

長い廊下を歩き、いくつかの部屋の前を通り川内大臣の書斎に利晃は通された。

「大臣、貴重な時間をいただきお礼を申し上げます。

私は萱津利晃といいます。見ての通り、すでに七十近

い老人です。昨今におけるC国における我が国への執拗なまでの領海侵入は目に余るものを感じています。さらに昨日は、我が国の漁船を違法操業だと追いつけ回すしまつ。日本の抗議に対し、C国の主権に基づいての行動だと声だかに逆に抗議を突き返してくる。今に拿捕さえしかねない。このままでは尖閣諸島はC国にいいようにもてあそばれ結果として失うことも視野に……」

利晃は憂いの余り両手の拳に力が入り、震えがちな声を必死に堪えながら話を続けかけた。

「萱津さん、パソコンの修理依頼ということですが、貴方とこうしている。本題だけを手短にかつ明確に聞かせて貰えるとありがたいのだが」

名も無い一民間人の利晃が川内防衛大臣の前で熱弁を振うことなど容易ではない。いや、不可能でしかない。それでも尖閣諸島におけるC国の振る舞いに憂いを抱いた利晃は何としてでも名実共に日本の領土として世界に認知させるべく方策を練りに練ったあげくの苦肉の策を持つての面会だった。

もつとも、そのアイデアが如何に確かな物であろうと誰に知られる事無く防衛大臣に直接面会を求める事など叶はずも無かった。わが国の与党ではあつても

中にはC国とのパイプを誇示する輩もいる。しかも超大物代議士といわれ、党の要職に就いている阿加井敏夫は媚中派代議士の筆頭として知られていた。阿加井の知れるところともなれば間髪をいれることなくC国に伝わり頓挫することは火を見るより明らかだった。事を進めるにあたって利晃は、高部泰造総理大臣、村山隆海上幕僚長、奥丘宏隆海上保安庁長官と実行部隊におけるその長のみが詳細を知り得る立場としたいと考えていた。特に海上保安庁を指揮する立場の奥羽和也国土交通大臣は現政権の与党ではあつても連立を組む陽明党の重鎮である。国民受けすることのみを第一義とし石橋を叩くかのような政策を掲げ、争いごとに繋がることをもつとも嫌い、たとえ交戦をとまなわない後方支援であつても紛争地への自衛隊派遣には慎重な党である。尖閣諸島での作戦を事前に知ることとなれば極秘ごととはいえ、マスコミにリークされ日本中が賛否両論の大騒ぎとなりC国の介入は目に見えてる。

「大臣。この作戦は超極秘とし、作戦場所は石垣島海岸として奥羽大臣には事前の了解を取り、海上保安庁の巡視船を作戦に……」

「確かに面白い。しかし、まずは総理が首を縦に振らない限り無理だ」

「おっしゃる通りです。しかし、私には確信がありません。必ず総理も面白いと言われるはずですよ。なぜなら、今の総理の支持率はコロナ禍における対応から厳しい状況です。それを一気に挽回するカンフル剤となりうるはずですよ。事、成就のあかつきには直ぐさま国会を解散し選挙に打ってれば過半数どころではありません。憲法改正も現実味をおびるはずですよ」

「それは、何もかもが上手くいったらの話だ」

「大臣、次の次ではなく高部総理大臣がもう一期、総理の椅子に座ることにはなるでしょうが、その後には総理の椅子に座るのは川内誠太郎先生ご自身です。そのためにも是非とも……」

川内大臣の顔つきが真剣味をおびている。利晃が持ち込んできた尖閣諸島を日本の領土としてC国に認知させる。いや、C国にも尖閣諸島が日本の領地であることなど承知の上での乗っ取り行為の繰り返しなのだ。表向きは海底に眠る豊富な資源であるとうそぶいているが腹の底にはC国が防衛ラインと見なしている『第一列島線』という戦略上もつとも重要な位置に尖閣諸島があるからだ。覇権国家としての地位をアメリカに取って代わろうと虎視眈々としているなかで東シナ海から太平洋へと海洋進出する唯一のエリアとして

何としてでも手に入れたいとの思惑がある。しかもこの先、台湾との戦火ともなれば攻め入るには恰好の位置にもある。だからこそ、現状を変えるために日々領海侵犯を繰り返し、既成事実を積み上げることで世界にC国の領土なのだと思わせたい。これを阻止するには国際法の遵守を第一義としている日本国にとつて、世界に改めて我が領土で有ることを知らしめ、C国には現状を変える手段は戦争でしかないことをわからせる必要がある。いかにC国といえ、アメリカや自由主義国圏を巻き込んだの戦火の道を選ぶことは出来ない。国家の破滅を招く行為となることぐらいいは赤兎でもわかる。平和裏に今の現状を変え、尖閣諸島を我が領土として未来永劫に日の丸をなびかせることに繋がる。川内防衛大臣は確信していた。

「総理、川内です。ご多忙の恐れ縮ではありませんが明日、官邸内にて内密にお時間をいただきたいのですが？」

利晃が道具箱を下げて屋敷を出ると直ぐさま川内防衛大臣は高部総理の携帯に電話を掛け、明朝の面会へと繋げた。

「面白い。アメリカや台湾を巻き込んで、いや多くの国を巻き込んでの企て、本当に一民間人の考えなのか」

「はい、背後関係については何もありません。昨晚から今朝にかけて洗い上げましたが何ら問題は。定年後の健康維持にと病院のパート清掃業務に汗している初老の男です」

「わかった。今夜にでも直接話を聞きたい。但し、菅沼官房長官にも同席してもらおう。実施も含めてどうするかはその上で決めたい。詳細を知るのは川内防衛大臣と菅沼官房長官と私の三人だけとする。秘書も含めてそのほかにはフェイクを信じ込ませる策を」

「わかりました。それでアメリカと台湾には？」

「トランチ大統領と槽総裁には真の目的を話すしかないだろう。その上で理解と協力を求める。ことが上手く運ばばC国は二度と尖閣諸島に手を出すことは出来ない。作戦を命じたトランチ大統領の人氣があまり一月に控えた大統領選に向けて今のピンチをはねのけるのに十分な価値がある。槽総裁にとつても一国二制度の名の下に強攻策を目論むC国を牽制できる。後ろ盾としてアメリカと日本ともなれば、同じように尖閣諸島の領有権を主張はしても形の上だけとなる。漁業権を譲歩すれば表面上は何もいわなくなる」

「確かに。アメリカの空母を含めた艦隊に海上自衛隊の艦隊が沖縄で合流して台湾海峡を大編隊が通過、台

湾海軍が合流し、面舵を取って魚釣島寄りにXデーには海上停泊」

川内防衛大臣の頭には、台湾海峡を指す日米共同作戦の大艦隊を察知した時点で『強烈な反対』と叫ぶC国報道官の歪んだ顔が浮かんでいた。

その日の夜。総理官邸の総裁室の灯りが消えることはなかった。

利晃が計画内容を政治家に話すのはこの日で三回目となる。川内防衛大臣に直接面会を求めても叶うことはない。しかし、与党参議院議員の青重芳治なら尖閣諸島を憂う代議士である。議員となる前にはラジオ番組にコメンテーターとしてマイクの前に立っていた。

議員となった今も時折、パーソナリティとして出演していることから可能だと考えていた。早速に連絡を取ると面会が叶った。利晃の案を一通り聞いた青重参議院議員は、予想通りその場で川内防衛大臣に電話を入れてくれた。

川内防衛大臣には、歯に衣を着せぬ独特の話し方と人氣のある青重芳治を無理矢理参議院選挙に押し出した経緯がある。青重参議院議員からの取り次ぎとなれば会わないわけにはいかない。そうなれば、川内防衛大臣を経由して高部総理大臣へと計画が進言されると

利晃は目論んだ。

利晃の計画は、尖閣諸島を日本の領土であると平和裏にC国が認めざるを得ない状況を作り出すことになった。

「今、世界はコロナ禍でどこも大変な思いをしています。そしてその原因を作ったのはC国だと誰もが思っています。しかし、当然のようにC国はそれを認め謝罪をすることはありません。今ならどの国もこの計画が成功裏に完遂することが出来れば溜飲を下げるでしょう」

利晃は、落ち着き払っていた。高部総理も菅沼官房長官も何かを発することも無く利晃から視線を外すことなく聞入っていた。

「計画には、アメリカと台湾にも参加して貰うことになりません」

利晃の計画はC国の関心を台湾海峡を通過する大艦隊に向け、その間に海上自衛隊特殊部隊が尖閣諸島に上陸し、魚釣島の海岸から一万発の花火を打ち上げることだった。そしてそれを海上保安庁の巡視船に乗り込んだいくつかの国の大使級が日本の花火の技術の高さを満喫する。さらにそれを外国のテレビ局が一斉に世界に向けて同時配信をおこなう。『日本が各国の大使

を招き尖閣諸島の魚釣島海岸から一万発の花火をコロナ禍で苦闘する医療従事者と支援者に対し感謝と慰労の思いを込めて打ち上げた』と。世界中で拍手の嵐が渦巻くに違いない。それは世界中が尖閣諸島は日本の領土であると認識するに等しい。その時点でC国はほぞを噛むしかない。花火の最後を飾るのは、滝のごとく流れる仕掛火花が消えて月明かりだけが海岸を照らし感謝と慰労のショーの幕が降りると同時に海岸に張られた大スクリーンに映し出される医療従事者と支援者、さらに参加国大使への感謝の言葉がエンディングロールのごとく英語、フランス語、イタリア語、中国語そして最後に日本語で繰り返し流される。世界中から一斉に賞賛の渦が巻き起こるのは間違いないと利晃には確信がもてた。拍手が鳴り止むと同時に、大使とテレビクルーが乗り込んだ海上保安庁の巡視船が石垣島に舵を取る。同時に特殊部隊はスクリーンを張るために持ち込んだ鉄パイプをばらし、新に簡易の灯台を作るために櫓やぐらに組み替える。十メートルを超える櫓を組むには充分な材料が持ち込まれている。そして最上段には特大の回転灯を据え付ける。サーチライトが回転をしながら尖閣の海を照らす。

C国はただ見ているしか手立てはない。事の全てが

各国のテレビクルーによって同時配信されている。ましてや各国の大使級が乗り込んだ巡視船も目の前に停泊している。そのうえ、大艦隊がすぐ近くで目を光らせている。C国にしてみれば、最初の一発目の火花が上がった時点で後の祭り。夜が明けて『釣魚島はC国の領土』と口にすれば世界中からの笑いものになる。ましてや、なんらかの報復処置を取れば孤立の道歩むことになる。地団駄を踏むくらいしかC国には残されていない。

翌日の尖閣には多くの機材を積み込んだ運搬船が海原に浮かぶ。重機も大型発電機も見える。陸上自衛隊施設部隊が棧橋の設営に取りかかる。官舎が建てられ自衛官が常駐出来るまでの一ヶ月あまりは日夜止まることなく工事が進められ、特殊部隊は周辺の警備任務につく。海上自衛隊の艦艇も周辺海域の警戒に当たる。当然のように潜水艦が静かに海底に潜み、日の丸を付けたF35Aが一時間ごとに上空で旋回しては南西空エリアを管轄とする那覇基地へと帰って行く。

今のC国は、海警局を国家海警局から中央軍事委員会の配下へと移動させ、C国最高指導者の直接指揮下となつた事で海上警察の象徴でもある白い船体ではあつても軍艦と何ら変わりが無い。もつとも、軍からの

払い下げ船を白く塗り替え機関砲さえそのままの警備船さえ尖閣諸島の海域に現れている。そして連日のように領海侵犯を繰り返しているのだ。しかし、これもXデーを堺に日本の領海視野から消えるさるしかない。「面白い。確かに総理の言われるとおり面白い」

菅沼官房長官の顔が緩んでいる。

「トランチ大統領と槽総裁には明日の朝一番にでもホストラインを通じて理解を得ることにする」

高部総理が決意を示すかのように口にした。

「総理、ダミー情報として台湾海峡航行作戦として大艦隊構想を流しましょう。もつとも暫くはシラを切り通すことで真実味を増し、二段目の情報として魚釣島ではなく石垣島での花火大会」

「わかりました。奥羽国土交通大臣からは石垣島での医療従事者への謝意と励ましの花火とし、招待大使とテレビクルーを乗船させる海上保安庁の巡視船の使用許可を取ることに」

「それで行きましょう。阿加井幹事長にはアメリカが艦隊を組んで台湾海峡を通過する際に海上自衛隊の艦隊が参画する計画であるとXデーの一週間前くらいに知らせればいい。もつとも、それまでに我々の動きを察知して探りを入れてくるだろうが当面はシラを切る

ぐらいが丁度いい。知った時点でC国にそれとなく伝わり『強烈な反対を表明』が出るであろうが」

既に高部総理の脳裏にはトランチ大統領と槽総裁の顔が浮かんでいた。

「萱津さん、素晴らしい発案をありがとうございます。Xデーを含めて今後の事を一民間人の萱津さんに知らせることはありません。あとは我々の持ち場です。ご理解ください。どれほどかはわかりませんが数十年後に今回の出来事は一民間人である萱津さんのアイデアが事の始まりだったと公表することになるとは思いますが……」

菅沼官房長官は利晃に最高の敬意を表すかのように深々と頭を下げ両手を差し出した。

「こちらこそ私ごときの言葉を受け入れていただきありがとうございます。私としては尖閣諸島における懸案が解決さえされればそれで何も言うことも望むこともありません」

利晃も腰を深く折り菅沼官房長官の両手を受取るかのように握り、礼を述べると総理官邸を後にした。

「早速、ことに移そう。Xデーは九月十五日、一ヶ月半あれば充分だろう。自衛隊内部の指揮については全てを川内防衛大臣に任せる。奥羽大臣には山田陽明党

委員長同席で私から直接説明します。石垣島での花火大会を実施すると。その上で、今後における計画は都度の報告を条件に、海上保安庁の船長への指示は直接川内防衛大臣が行うと了解を取ることに。花火師の手配は菅沼先生にお願いします」

こうして、石垣島での花火大会と大艦隊が台湾海峡を通過することがダミー計画としてXデーと共に決まった。

「トランチ大統領、この作戦を成功させればアメリカが日本とともにC国に煮え湯を吞ませて追い払える。奴らは尻尾を丸めて二度と出てはこれない。あとは犬の遠吠えも同じ。周しゅう国家主席の失職は免れない。トランチ大統領の再選に大きく貢献することとなります」

「泰造総理OKだ。最高シークレットとして真の計画は私独りの胸の内としよう。あとは川内防衛大臣とアメリカ海軍に任せる。今から周の苦虫を潰したような顔が楽しみだ」

高部総理大臣とトランチ大統領の話は難なくまとまった。

「槽総裁、香港はこのままでは先の見通しは暗い。香港の次は台湾とばかりに息を撒いて周国家主席が手を出してくるでしょう。尖閣諸島を手に入れ、そこを足

がかりに攻め入ってくるでしょう。今、C国に手を打たなければ台湾にとつても厳しいことに……。アメリカを背後に、さらに我が国とともに台湾があるとC国に示す必要があります。香港返還時の一国二制度を五十年続けるとの国際的な約束の裏には五十年先には共產主義も国民の力で自由主義への改革が成されるだろうとの思いが込められていたのは槽総裁もご存じのはず。台湾が尖閣諸島の領有権を主張していることを承知の上でのお願いです。尖閣諸島周辺の漁業権については大幅な譲歩も厭いません」

「わかりました高部総理。台湾としては一つ条件があります。台湾海峡を通過の際に我が台湾海軍の艦艇も合流させてください。尖閣諸島を挟んでC国海警局公船にガンを飛ばしてやりましょう」

トランチ大統領への電話よりも力のこもった高部総理の説得に台湾の明日を睨めば槽総裁も承諾をするしかなかった。

利晃の建てた計画は自身の手を離れ、国家の戦略として動き始めた。

「村山海上幕僚長、九月十日に那覇からアメリカの艦隊と合流して台湾海峡をデモンストレーション航海する準備をしてください。台湾では台湾海軍もこの作戦

に参加します。C国の横暴に歯止めを。それと特殊部隊の精鋭隊員十名を私に貸してください。石垣島で花火を打ち上げたいと思つて居ます」

「特殊部隊の隊員をですか？」

「そうです。何としても承諾いただきたい」

真の作戦は村山海上幕僚長とて話すわけにはいかない。この作戦には日本の将来が掛かっている。上手の手から水のとえもある。今は、総理と官房長官と合わせた三人だけが知り得る真の作戦だった。

川内防衛大臣が深々と頭を下げての依頼に村山海上幕僚長も深く詮索することなく快諾するしかなかった。

「横内一等海佐、明日の朝一番で塚本三等海尉を川内防衛大臣のところへ行かせてくれ。詳細は私にもわからない。表向きは石垣島での花火の打ち上げだそう。国家の威信が掛かっているとだけ塚本三等海尉には伝えてくれ。何も言わずな、これは命令だ」

海上幕僚長といえども、小隊を呼び出して直接の命令を下すわけにはいかない。規律を乱せば軍としての組織が成り立たない。選び出した特殊部隊を管轄する司令官の横内一等海佐に極秘裏での命令である胸を伝え塚本三等海尉を川内防衛大臣のもとへと向わせた。

「塚本三等海尉、命令により参りました」

翌朝一番、川内防衛大臣室のドアを塚本三等海尉がノックした。

「塚本三等海尉、気楽にしてください」

川内防衛大臣は塚本三等海尉をソファーへと促すと同時に、秘書達に部屋の外に出るようにと視線を投げた。

「塚本三等海尉、あすから部下九名を連れて秋田の大仙市に赴いてください。作戦の詳細について今は話せませんが隊長の塚本三等海尉には概要だけ知らせておきます」

川内防衛大臣は、来月中旬に離島にて日本の威信を賭けた花火の打ち上げを計画している。大仙市の花火師のもとで訓練を積んで欲しい。期限は今月一杯。作戦の決行日はその時が来たら指示するものの隊員には離島で花火とだけ知らせるように。なお、大仙市には身分を伏せて私服で赴くこと。指導をお願いした花火師の師匠のみが海上自衛隊員であることを話しており、それ以外には離島での打ち上げとしか話していないこと。花火の次はそのたの機材の取り扱いについて那覇基地で訓練を積んでもらうとした。

大仙市は菅沼官房長官の地元であることから好意にしている花火師に白羽の矢が当てられた。

「わかりました。大臣、一つだけお願いなのですが」「なんでしよう?」

「今は何も聞きませんが、作戦決行の朝には隊員の志気を高めるためにも詳細を教えてくださいませんか?」

「わかりました。お約束しましょう」

その日の午後になって奥丘海上保安庁長官が現場の最高位である渡辺海上保安監、さらに巡視船『りゅうきゆう』と『いず』の船長でもある二等海上保安監の篠崎広一と宮田敬吾の三人を引き連れて川内防衛大臣室を訪れた。

「お忙しいところをお呼び立てして恐縮です。また、C国海警局の公船とのにらみ合いに神経をすり減らす毎日、頭がさがります」

川内防衛大臣は日々の海上保安庁の激務を労うかのように一人一人と握手を交わし、ソファーへと招き入れた。

「それで、川内防衛大臣から直々の任務命令があると奥羽大臣からの指示でしたが……」

川内防衛大臣の丁重な招き入れに恐縮しながら奥丘海上保安庁長官が口火を切った。

「まずは、ここでの話は一切において他言のないよう

に願います。国の威信に関わる極秘事項であることを肝に銘じてください」

「わかりました」
奥丘海上保安庁長官が部下を代表して承諾の意思を示した。

「計画の詳細について今は申し上げられませんが、九月の中ごろに『りゆうきゆう』には石垣島から十人ほどの人員と九トンほどの資材を運んでもらいたい。翌日には同じく『いず』にも人と機材を運んで貰うことになる。こちらの人数は現在不明ではありますが各国の大使級が五十人を超えることに。あわせて食事の準備もお願ひすることにはなりますが特別なものにする必要はありません」

「わかりました。それで目的地は？」
「それは今は申しあげられませんが。当日での指示ということに」

大臣室のドアをノックして海上保安庁の面々が腰をあげるまでに十五分ほどではあったが緊張した空気が室内に立ちこめた。その空気が事の重要性を物語っていることを誰もが感じながら防衛省を後にしていた。
「たしか、秋山君だったね。一段といい女になったね。もう少し私が若ければモーシオンを掛けるところだ」

阿加井幹事長が、川内防衛大臣おつきのSPとして総理官邸に来ていた秋山巡査長の後ろから満面の笑みを浮かべ、セクハラと取られても反論できないほどに親しみを込めての声を掛けた。

「阿加井先生、ご無沙汰をいたしております」
秋山巡査長は姿勢を正し、深々と腰を折った。

「いま、川内君は総理と？」

「はい。私達は官邸の入口で待機するようにと」

「何か昨日から騒がしいようだが何かあったのかね？」

いつもと違う総理と防衛大臣の動きを不審に思った阿加井幹事長が探りを入れてきているのは明らかだった。

「いえ、私は何も存じ上げてはいませんが」

秋山巡査長にも一昨晩の私邸への電気屋の来訪らしい何かの動きがあることは察しが付いていた。ましてや朝一番に海上自衛隊が昼一番には海上保安庁それぞれの制服組が大臣室に入った。何が起こったのだろう？ いや、何が起こるのだろうか？ と誰もが感じることは有っても口にするには出来ない。SPとしては初歩の心得だった。

「まあいい。防衛省に制服組が入ったと報告があった。

何かがある……」

独り言のように阿加井幹事長は呟きながら官邸を出て行った。

「何処にでも忠心者がいるのね。そこまでして出世したいのかしらね」

秋山巡查長が声に出すことなく呟いた。

大臣を訪ねて防衛省に誰が来たかなど阿加井幹事長に知れるはずはない。しかも、今日のできごとである。「しかじかこんなことがありました」と報告する輩が防衛省内にいることに他ならない。C国とのパイプを誇示する阿加井幹事長としては防衛省の動きを常に把握しておく必要があった。コロナ禍や香港での一件、ウイグル族の弾圧やインド国境での紛争。南シナ海ではやりたい放題。尖閣諸島における連日の領海侵犯など枚挙するに暇が無いC国の覇権主義。その国家主席を事もあろうか国賓として迎えると声高に口にしていく阿加井幹事長。

「いいか、目先の事だけ見て政治をおこなってはいけない。遠い先を読んでこそ政治だ」

阿加井幹事長の口癖だった。今のC国がこのままなわけがない。C国の共産党員は九千万人、わずかに全人口の六%に過ぎない。この六%がC国を自分たちに

都合の良いように操っている。国が豊かになればなるほど人は自由を求める。自分のために自分らしく生きたいと願う。そこに共産主義はなりたない。いつか必ず共産主義は崩壊する。その時にどう動けるかが日本の将来を左右する。そのためには泥水を浴びることぐらいなんだとの持論を展開してはC国に接近することを厭わなかった。秘めたる高等テクニクなのか単にハニートラップの罠に掛かっているだけなのかは数十年後の世界を見なければわからない。

「総理、あらかたの準備に入ることはできました」

「そうですか。こちらもトランチ大統領と槽総裁の理解を得ることができました」

「それでは、次の計画として各国の大使への連絡をどのようにしましょうか？」

全ての根回しは済んだと高部総理と川内防衛大臣が次のステップに進めるべき打ち合わせに菅沼官房長官とともに入った。

「外務大臣の常磐先生に黙ってというわけにもいかないでしょうから私が先ず常盤先生に話を持ち込みましょう。但し、石垣島での花火打ち上げとして」

「そうですね。コロナ医療関係者への感謝と激励とすれば反対も出来ないでしょうし。もともと、なぜ石垣

島なのかとしつこいかもしれませんが……」

党の重鎮への気遣いを怠らない高部総理に菅沼官房長官も同意しながらもその光景を思い浮かべ笑みを浮かべた。

「ありえますね。しかし、もう少し後にしましょう」

「もう少しとは？」

「各大使には外務大臣から声を掛けていただくとしてXデーの二週間前くらいで良いでしょう。大使自身の都合が悪ければ誰でもいい。その国の代表者としてなら書記官だろうが警備員だろうが……」

「おっしゃる通り。テレビクルーについては二、三日前でも喜んで参加するでしょうから」

計画が前に動き出して二週間。阿加井幹事長から川内防衛大臣に対し、議員会館に来るようと呼び出しが掛かった。

「貴方も忙しい躰だろうから率直に訪ねる。川内君、君と総理は何をたくらんでいる」

阿加井幹事長の顔がこわばっている。不穏な動きを察知して二週間、何ら具体的な情報が入らないことに苛立ちを隠せないのが川内防衛大臣には手に取るようにつたわってくる。

「さすが阿加井先生。先生に謀は通用しませんね。実

はトランチ大統領から台湾海峡のパレードに海上自衛隊も参加しろと言ってきています。拒絶ともいかず極秘裏に参加の方向で調整をしているところですよ」

「何がパレードだ。C国への当てこすりじゃないか」

「確かに。そのパレードには台湾海軍も参加とのことです」

「台湾までが……。そんな事になればC国は何らかの報復をしてくる。得なことはない。中止しろ」

「それがそうはいかないのです。トランチ大統領としても十一月の大統領選挙でなんとしてでも再選をと。

しかし、これが中々敵しいことに……。一発逆転の点数稼ぎにしたいのか我が国と台湾の参加を強く言ってきています」

「……。総理はなんと？」

「総理も、香港のことに表だって特に声だかには発していませんが、次は台湾がと心配されております。パレードならいいんじゃないかと」

「馬鹿な、パレードなどとまやかしを……。C国への当てつけ、威嚇のほか何の目的がある。それでいつだ？」

「まだ正式には決まっています。三国での調整中ではありますが九月の中旬ごろと……。それに他の国の参加があるやもしれないとか……」

川内防衛大臣が阿加井幹事長に呼び出されたその深夜、C国の共産党本部が慌ただしく動き始めていた。

「周^{しゅう}国家主席、トランチと高部に槽までがグルになって台湾海峡を大艦隊の航行計画が浮上しています」

阿加井幹事長からの一報を元に、C国の調査機関が事の真意を確かめるべく深夜にもかかわらず集めた情報の結果を朝一番で周国家主席への報告に走った。

「頭の悪いトランチの考えそうなことだ。忠犬気取りの高部と槽にも困ったものだ」

「周国家主席、起きた事が招く全責任は愚かな国が負うことになる。計画には強烈な反対を表明すると早々に報道官発表を……」

「任せる。何処を艦隊が通過しようが痛くも痒くもない。いずれは我が国にひれ伏すことになる」

C国はそれ以上の詮索も行動も起こすこと無く静観を装っていた。

「失礼するよ、総理。C国報道官の発表ですが……」

派閥の長でもある常^{としまわ}磐^{まさよし}昌^{まさよし}義^{まさよし}外務大臣が総理執務室にノックと同時に入ってきた。

「いま、常磐先生にお電話をと思っていたところですが」
相手が総理ではあっても与党の重鎮として巾を利かせている常磐外務大臣。高部総理といえどもやり手の

中堅政治家でしかない。ましてや総理になるための力添えもした派閥の長である。カメラレンズさえなければ政治家としての上下関係が優先することになる。

「C国の言うとおり、アメリカと台湾の艦隊に我が海上自衛隊の艦隊が作戦参加します。このことは川内防衛大臣も承知しています。ただ、今回のこの計画には常磐先生のお力もお借りしたいと思っています」

「私の力？」

「はい。アメリカや台湾の領事館はもとより主立った国の領事館の大使級を招待して花火大会を見学していただきたいと……」

「花火大会？ 何をのんきな」

「常磐先生、今世界はコロナ禍で大変な思いをしています。それにつけるようにC国のやりたい放題。そんなC国に我が国の心の大きさを同時に見せつけたいと考えています。医療従事者やその支援者に対する感謝の花火を一万発打ち上げます。そして感謝と慰労のメッセージを全世界に配信します」

「艦隊と花火を同時にやるということか？」

「おっしゃる通りです」

「阿加井が黙ってはいないぞ。すぐにC国に連絡をいれる……。それくらいは計算の内に入っていると云っ

た顔つきだな。それで、何処の国に？ いつ？」

「阿加井先生のこととはともかく、天候の問題もありますので決定はもう少し先になります。それでも、九月の中旬にはと考慮しております。私としては国の代表であれば必ずしも大使ではなくても書記官でも警備員でも参加さえ承諾いただければ……」

「わかった。まさか警備員というわけにはいかないが、最低でも一等書記官を。それで招待国のリストは？」

高部総理は机の上からメモを取って常警外務大臣に渡した。

アメリカ、台湾、イギリス、フランス、ドイツ、カナダ、オーストラリア、イタリアと国名が記されていた。

「韓国は呼ばないのか？」

「彼の国はちょっと……。それにC国への忠義心をだされても困りますので」

「わかった。それで感謝のメッセージを流す際には協賛国として国名も上げるのか」

「もちろんです。それぞれの国にとっても誇りの持てる花火となります。同時に各国のテレビクルーにも声をかけます」

「そいつはいい。C国が一番嫌がる手段だ。孤立しか

ねない。しかし、なぜ石垣島なんだ？」

「特に理由はありません。コロナ禍で大変なときですので東京から離れた島がいいのではと」

想像していたとおり常警外務大臣が『なぜ石垣島なんだ』と聞いてきた。高部総理は笑いを堪えながらコロナ禍を理由とした。

一日と計画が進んでいく。台湾海峡の航海と石垣島での花火について関係する政治家と国々の大使館の了解は全て整った。

一方、海上特殊部隊による花火の打ち上げ訓練についても終盤を迎えつつあった。

「塚本隊長、明日でこの訓練は終了しますが、花火の打ち上げを何処でやるんですか？」

「そりゃあ、海上自衛隊としてやるんだから日本ということはない。アフリカとか中東ですよね？」

二週間の訓練もあと一日を残すのみ。明日が総仕上げとしての位置づけになる。わずかに二週間ではあったが、いずれも精鋭の隊員である。さすがに飲み込みも早く手際もいい。隊員達の思いは早くも実戦を見据えていた。

「私もまだ多くの作戦を知り得ている立場に無い。明日からはスクリーンの設営と映写に関わる訓練とな

っている」

「花火の次は野外映画ですか？」

「そういうことだ。ただ、ここからは私の想像だが、我々特殊部隊がその任務を命ぜられたと言うことは、厳しい川なり海、もしくは山道を多くの機材を持って制覇する必要があるということだ。並みの自衛官には務まらない激務だと覚悟しなければならぬ」

「こいつは楽しみだ」

「何を言いやがる。おまえがいの一番にへばるんじゃないのか」

「ばかやろう」

どの隊員も自信があるのか軽口が飛び交い笑いの渦となった。

Xデーは天候の都合により九月十六日の午後七時と決まった。その日の夜は満天の星空となる予報が出された。アメリカの艦隊と海上自衛隊の艦隊は台湾海峡を面舵にとり尖閣諸島間近に大艦隊が停泊する時間にあわせて那覇沖に集合した。

アメリカ空母『ロナウド・レーガン』を始めとしたアメリカ艦隊十隻。海上自衛隊は護衛艦『いずも』をはじめとした十隻の艦隊を組んでの台湾海峡航海となった。これほどの大艦隊を組むことなどこれまでには

ない。さらにこれに台湾の艦隊が五隻くわわり合計二十五隻の大々艦隊となる。C国の驚く顔が高部総理と川内防衛大臣の目に浮かんだ。

「諸君、ご苦労である。今回の作戦は秘密裏に進められた。真の目的は海上幕僚長でさえ知らせていない。諸君らにはこれから尖閣諸島に向つてもらおう。沖合からゴムボートで九トンあまりの機材を運んで貰うことになる。そのほとんどは花火一万発であり濡らすことは許されない。スクリーンを張る鉄パイプと映写機、さらに発電機と幾つかのバッテリーとなる。海岸に全ての機材を運び上げ、夜の内にて全ての準備を終え、空からの視界に入らないようにカモフラージュをし、翌十九時に第一発目を打ち上げる。最後に滝の流れを火花で演出し、消炎とともにスクリーンにエンディングロールを映し出して第一段階の作戦が終る。その後、スクリーンのために使用した鉄パイプをばらし、新に櫓をくみ上げる。最上段に回転灯をとまず。実質的な灯台の灯りとなる。翌日からは自衛隊駐屯のための栈橋工事や官舎の設営が始まる。諸君らはその警護の任務についてももらいたい。魚釣島の台湾側には二十五隻の大艦隊が睨みをきかせている。C国はなすすべもなく引き上げることになる。諸君らには国の威信を賭け

た任務となる。心して全うしてもらいたい。以上、よろしく願いたい」

特殊部隊の出発を控え『りゅうきゅう』に乗り込む前に集められた塚本三等海尉を始めとした十名の特殊隊員に川内防衛大臣がテレビ画面を通してではあっても直接語り、頭をさげた。

川内防衛大臣としては、石垣島まで出かけて一人一人に声を掛けたかったに違いない。しかしそんな動きを示せば媚中派の誰かに察知されかねない。C国に真の企てが漏れる事にも繋がる。それだけは何としても避ける必要があった。

「全員、川内防衛大臣に対して敬礼！」

塚本三等海尉が肝を据えての号令を掛けると、全隊員が躰に心棒を入れたかのように姿勢を正し、画面の中ではあっても川内防衛大臣の視線を熱く受け止め敬礼で応えた。

「全員、乗船！」

今一度、塚本三等海尉の号令で整列し、巡視船へと向った。

Xデーの前日の深夜、魚釣島沖合に特殊部隊の隊員と多くの機材を積み込んだ海上保安庁の巡視船『りゅうきゅう』が停泊した。

「総理、明日の朝早くから各国の大使級が石垣島から海上保安庁の巡視船に乗り込んで沖合から海岸で打ち上げられる花火を見学するそうじゃないか」

どうして前もって俺の耳に入れないんだとでも言いたげな不機嫌さをまき散らし、阿加井幹事長が総理執務室のドアをノックするでもなく入ってきた。

「……、阿加井先生には報告が遅れましたが、世界で蔓延しているコロナ禍に従事している医療関係者や支援者の感謝と慰労の念を込めた花火を打ち上げます。各国の協賛を受けての催しです」

いきなりの来訪に驚きながらも、高部総理は総理で、『あなたに知らせた瞬間にC国に伝わり全てが頓挫する恐れがある。知らせるわけがないだろう』と、無言の圧を放っていた。

「昨日の艦隊の出発とは何か繋がっているのか？」

「いや、あれはトランチ大統領の要望に応えただけ、花火はまた別物です」

「そうか」

互いに腹の探り合いが続いたものの阿加井幹事長は高部総理の話を鵜呑みにして花火の件についてはC国への連絡をすることはなかった。

「塚本隊長、ゴムボート二十艇と機材を降ろします。」

ゴムボートにはそれぞれ五百キロほどの機材が積み込まれています。花火は水に濡れないように養生はしてありますがくれぐれも用心をしてください。波は穏やかですが海岸までは二キロ以上あります」

「篠崎船長、ご好意に感謝いたします」

塚本三等海尉が篠崎船長に感謝の握手を求め、手が離れると同時に姿勢を正した。

「篠崎船長に敬礼！」

十名の特殊部隊が横一列に並び敬礼をすると近くにいた海上保安庁の職員全員が返礼の意味を込め、その場で起立すると敬礼で返した。

「全員、下船はじめ！」

一斉に船縁に下げられロープを使い、海上に浮かぶゴムボートへと乗移った。下船を開始したときから特殊部隊の隊員は後ろを振り返ることはしない。作戦の完遂だけを見据えて前に進むように訓練を受けている。特殊隊員の動きは闇に紛れての作戦であり、数キロ先のC国海警局の公船からは監視船が壁となり気づかれること無く海岸にたどり着くことができる。もちろん手こぎでの進行となる。C国の潜水艦が耳を澄ませていることも考慮しなければならない。

「よっし、まずはゴムボートを始め、全ての機材を岩

陰に隠す。衛星を使ってC国の監視の目に触れることは何としても避けなければならない。夜が明けるまでに終らせるのだ」

塚本隊長のかけ声のもと各隊員が必死の作業を繰り返す。設営とはいえ、それほどにたいした事ではない。

全員が要領よく持ち場をこなせば一時間もすればスクリーンを張ることができる。花火を打ち上げる筒がビール瓶ケースほどの大きさの箱の中に並べてくられている。ただ一万発ともなれば花火の大きさによって筒の大きさも異なる。それだけでも百ケースを超える数になる。花火玉も同じだ。夜空に描かれる花火の大きさによって玉の大きさも重さも違う。一番小さい三号玉は五千個。重さが二百グラム、百二十メートルの高さで開き、その直径は六十メートルにもなる。十号玉だと玉の直径は三十センチほど。玉の重さは九キロ近くもあり、打ち上げの高さも開いた時の直径も三百メートルを超える。この大きさの玉が百個用意されている。その間のサイズの玉がそれぞれ用意され、合わせて一万発となっている。これだけの量を人力で岸に上げ、しかも岩場の影に隠さなければならない。気の遠くなるような作業ではあっても誰しもが口を開くこともなく黙々と任務をこなす。白々と夜が明ける頃に

は全てを隠し終え、疲れた軀を横にすることが出来た。もちろん自身の軀も宇宙からの監視に察知されてはならない。無線も使えない。傍受されているかもしれない。誰もが声を発すること無く軀を癒やししながら次の夜を待った。

空の月は白く、辺りはまだほんのりと明るい。おそらく巡視船『リゅうきゆう』の船長が双眼鏡を覗いているにちがいない。作戦開始時間まで一時間となった。特殊隊員たちは機材を海岸へと運び、打ち上げの準備にかかった。三人の隊員は鉄パイプを組み、仕掛け花火の準備に掛かった。花火終了とともに映し出すスクリーンはまだ張らない。数十秒で張れるばかりの準備だけで終らす。

十九時十五分前、魚釣島の沖合に海上保安庁の巡視船『いず』の船体が見えてきた。島の反対側には二十五隻の大艦隊が海上に停泊している時間になった。

「王艦長、釣魚群島の向こう側にアメリカと日本、台湾の大艦隊が海上停泊しています。その数、二十五隻の大編隊です」

「わかっている。我が潜水艦からも事前に情報が入っている。台湾海峡からこちらに旋回してきているのだ」

「何か目的があるのでしょうか」

「さあな、それ以上のこととはわかっていない。わかっているのは海上保安庁の巡視船が新たにもう一隻増えたということだけだ」

C国海警局公船が四隻、視界の範囲内で海上停泊し、海上保安庁の巡視船四隻と睨みあっている。いつもの光景でしかない。違うのはいつもなら海上保安庁は三隻の巡視船でしかなかった。そのことを王艦長は訝っていた。

「王艦長―」

副艦長が釣魚島の上空を指さし驚きを隠すことも無く声を上げた。

「ヒュー……」

首筋が寒くなるような不気味な音を立て、火の玉が尾を引きずりながら二百メートル以上の高さまで昇ると、三百メートルほどあるうかという赤い花を大きな音とともに咲かせた。

「艦長、花火です。それも釣魚島の海岸から打ち上げられたと思われませう。奴らが島に上陸したんです」

「直ぐに本国に連絡を入れる。指示を仰げ」

C国海警局公船の船長の顔から血が引いていくのがわかる。上陸を見過ごしたともなれば失脚は免れない。艦長だけの責任で終るはずもない。乗組員全員が何ら

かの処罰の対象になる。もちろん海警局上層部もその責任を逃れることはできない。

一方の海上保安庁巡視船『いず』の甲板には各国の大使級がテールを囲み雑談を交わしていた。もちろん乗船前でのコロナ感染有無の検査を済ませ、陰性と判定された大使館員ばかりである。同じように検査を済ませている各国のテレビクルーもカメラを魚釣島上空に向けていた。時折、船上の大使館員の様子を映し出し、一斉に世界に向けて配信していた。

二時間を越えた夜空のショーが終ると魚釣島の海岸に仕掛けられた横幅百メートル、高さ二十メートルほどの火の滝が十分ほど流れると船上からどよめきが上がった。滝の最後の雫が落ちるとほぼ同時にエンドロールが英文で流れた。

「世界におけるコロナ対応医療従事者の皆さんと全ての支援者に感謝と慰労の思いを込めて日本の尖閣諸島魚釣島から花火を打ち上げました。まだまだ戦いの収束は見えてはいませんが必ずや打ち勝つことが出来る」と信じて頑張りましょう。ワクチンが開発される日はもう目の前にきています。協賛国、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・カナダ・イタリア・オーストラリア・台湾・日本と映し出された。英文が終るのに

続き、フランス語、イタリア語、中国語、日本語の順で同一文章がゆっくりと流れ、感謝の花火大会の幕が降りた。同時に世界中から拍手の渦が沸き起こった。苦虫を潰した国は唯一、C国だけであつたことは容易に想像がついた。

「トランチ大統領、おめでとうございます。再選は確実の状況かと。アメリカ国民の拍手喝采がこの日本にいても聞こえてきます」

「秦造総理、あなたとて同じ。直ぐにでも解散に打って出て改憲の準備を」

翌朝には両国のトップが成果をたたえ合った。

自衛隊の輸送機と輸送船が尖閣諸島へと向う。駐屯を可能にするためのあらゆる機材を積み込んでいる。

「周国家主席、あなたの運命はこれまでです。任期半ばではあつても退陣するしか道はありません。肅正の名の下に命の危険さえあります」

C国覇権を目指して強硬路線を突き進んできた周国家主席にしてみれば、これまでの強硬策はどれも明日のC国、十年後、五十年後、百年後のC国の姿を描いてのことだったが、共産主義国家の宿命ともいえる敵対派閥との争い。政権を取った派閥が他の派閥を徹底的に追い込み、その地位を剥奪してきた。その順番が

尖閣諸島における駆け引きに敗れたことにより早まっただけなのかもしれない。何らの報復手段をも放棄しなければ、世界から孤立しかねないほどの失態だった。おそらく、年が明けない内に、新たなC国の指導者が台頭し、取って替わるに違いない。身内同士の戦いにかまけている内に香港の有志が息を吹き返すであろうし、その勢いが少なからずC国内の民主主義者の芽を勢いづかせることにつながるであろう。十数年後には共産主義政権の衰退が始まるのかもしれない。

いずれにしてもC国は報復工作などに時間を費やしている余裕は無いはずである。名実共に尖閣諸島は日本の領土として世界中の認めるところとなり、南シナ海での争いごとにもC国のみが有利に幅を利かすことはもう出来ないであろう。

世界中に配信された花火大会を、コロナ禍対応医療従事者とその支援者への感謝と慰労を込めた賛同とは違い、ほくそ笑みながら鑑賞していたのは日本政府を除けば萱津利晃だけだったのかもしれない。

了

※本作品はフィクションであり国名及び登場人物等において真実とは異なります。また、尖閣諸島の『魚釣島』の呼称は日本政府、C国側呼称『釣魚島』と区別して記述しています。

外務省資料より(写真手前から南小島、北小島、魚釣島)

